

脈管学 50 巻発刊を祝して

矢崎 義雄

はじめに

「脈管学」は、日本脈管学会の機関誌として、学会員全員に最新の脈管学に関する研究と臨床の情報を伝えるために 1961 年に創刊された。本年度で 50 周年となる本邦では数少ない伝統ある総合的な学術誌である。

そもそも日本脈管学会は、慶應義塾大学生理学教室の林謙教授が、広島大学で同じく生理学を担当しておられた西丸和義教授をはじめとする 13 名の世話人に呼びかけられ、1960 年 9 月 30 日に設立総会が開催されて発足した。脈管系の研究は、当時も解剖学、生理学、薬理学、病理学、内科学、外科学、皮膚科学、整形外科学など広い領域で活発に行われていたが、その研究成果がそれぞれの学会誌に発表されており、各研究者間の交流がないばかりか、脈管学全般の進歩を通観することが困難であった。そこで基礎、臨床における脈管学に関する研究者が一堂に会して研究の発表を行い、互いに交流を深めることに対しての要望が強くなって日本脈管学会が設立されたことが、その趣意書に記されている。今日、学問領域がますます専門分化し、その統合の必要性が指摘されているが、50 年前にすでに俯瞰的な視点から学会が設立されたことは、林先生をはじめとした設立者の先生方の慧眼に深く敬意を表したい。学会の設立と同時に「脈管学」という学術機関誌が創刊されたことも、このような画期的な事業を展開された諸先輩に深甚の感謝を表したい。

そして設立当初から国際的な活動が活発に行われ、国際脈管学会(International Union of Angiology: IUA)及び米国を中心に活動されている脈管学の国際連合(International College of Angiology: ICA)と連携し、設立翌年の 1961 年には、関清先生が日本脈管学会の代表として第 4 回 IUA 世界大会に出席された。その後三島好雄先生を中心に参加され、両学会における日本脈管学会の果たす役割が大きくなり、その結果、1976 年には第 10 回 IUA 世界大会が

石川浩一先生により、そして 1998 年に第 18 回世界大会が私のもとで開催された。さらに 1999 年に第 41 回 ICA 世界大会が安田慶秀先生により北海道で開催された。

2008 年には、わが国における脈管学領域の研究成果を国際的に広く発信すべく、日本血管外科学会と日本静脈外科学会と協同で新たに、英文誌 *Annals of Vascular Diseases* が発刊され、学会としての情報発信機能が格段に向上するところとなった。

わが国における脈管学の発展

脈管は、全身の組織、器官に必要な応じた血液を中心とした体液を循環させ、生体のホメオスタシスを保持する生命に直結した重要な機能を担った器官である。400 年前に、William Harvey が血液の循環を初めて実証したことにより、医学、すなわち生理学という科学的な研究が始まった。このように、脈管学は実証医学研究の発端としての役割を果たしたといえる。そして、生理学的な手法を中心に病理組織学的なアプローチが加えられ、学問としての脈管学が大きく進展するところとなった。特に、国民死亡原因の主要な部分を占める脳卒中や心筋梗塞などの循環器疾患の基盤をなす病態が動脈硬化や血栓形成という、脈管、特に動脈における加齢現象であることから、脈管学の研究が注目され、社会的にもニーズの高い課題となり、循環器領域の幅広い分野から多数の研究者が参画し、最も活性化された研究分野のひとつとなった。

さらに、近年の分子生物学に基づいた研究方法の導入により、脈管が血液などの循環を保持するための導管としての受動的な機能だけではなく、構成する血管内皮細胞などから、NO などの生理活性化学物質やエンドセリンなどの強力な血管作動性物質を自ら分泌して血管の収縮や弛緩を制御する一方、浸潤するマクロファージなどが多様なサイトカインを放出して病変を形成するなど、脈管が単なる導管ではなく、常に活動している活性のき

わめて高い器官であることが明らかとなり、分子生物学の領域でも注目される分野となった。

そして、最近臨床に導入された、新素材を活用した各種デバイスの開発や内視鏡技術の進歩、さらにはコンピュータシステムをフルに活用した CT や MRI などの画像診断の飛躍的な展開、血管造影装置の画期的な改善など、脈管の診断、治療分野での進歩には目覚ましいものがあり、特に非侵襲的な診断法、治療法の発展は隔世の感がある。冠動脈で始まった血管狭窄部位の拡大を目指したステントの活用は、今日では脳内動脈から大動脈へと広く応用され、その安全性と臨床的な有用性はほぼ確立されるようになった。すなわち、最近の血管外科手術領域の進歩は、内視鏡治療と血管内治療に代表され、その適用は合併症のある症例から高齢者まで拡大され、多くの患者がその恩恵を広く受けられるようになった。

このように、基礎的な研究の進歩についての最新情報から、臨床現場で活用され、患者の予後や QOL の改善に大きく貢献している診療技術についての情報まで、広くコミュニケーション出来る場としての学会である日本脈管学会と、その機関誌である「脈管学」の果たす役割はますます大きくなるものと期待される。

日本脈管学会と「脈管学」の課題

わが国における人口の高齢化により、脈管疾患が社会的にも注目されている中で、最近の進展の著しい分子生物学的アプローチの導入と、新素材の開発やコンピュータ技術を活用した、脈管疾患に対する治療や診断法の目覚ましい発展についての最新情報を、日本脈管学会が学術機関誌や学術集会を通して発信し、専門医ばかりでなく、一般臨床医を含めて幅広く伝える大きな役割を担っている。

しかし、基礎医学から内科、外科、放射線科など幅広い領域において統合的な視点から学術活動を行っている日本脈管学会とその学術機関誌である「脈管学」は、最近の各種学会が専門分野に先鋭化する趨勢に抗することが困難となり、学術集会への参加者も減少する傾向があり、学会設立時の趣意に即した統合的な学会の重要性が

広く認識される活動をさらに強化する必要がある。

このような視点から、日本脈管学会としての組織形態の見直しも求められるようになった。すなわち、学会そのものが基礎医学から幅広い臨床医学の研究者により構成されていることから、その組織形態は任意団体の形式をとり、各領域の研究者の総意で運営されるような仕組みで今日まで 50 年間経てきたところである。しかし、少なくとも社団法人としての組織を確立すべく定款を定め、活動の基盤を固める必要性が認識されて、2003 年に日本脈管学会の総会にて現行の定款が認定された。今後は学会としての組織が明確化されたことから、学会の活動がさらに積極的に展開されることが期待される。

先に述べたように、脈管学は研究領域としても幅広く、先端的な研究実績も注目されているが、高齢化社会を迎えたわが国において、脈管疾患としての臨床的な重要性は日増しに高まっていることから、脈管疾患に対する診療の質向上と均てん化が社会的にもニーズのきわめて高い課題になっている。そこで、日本脈管学会は学会として適切にこの課題に取り組むことも強く求められているところである。このような社会と時代のニーズに応じて、日本脈管学会では脈管専門医制度の確立に向けた検討がすすめられた。その結果、2007 年に日本脈管学会認定の脈管専門医制度が発足することとなり、新たな視点から日本脈管学会の活動が展開されることが期待されている。学会誌の「脈管学」もこのような視点からの情報発信を行い、専門医制度の定着とわが国の脈管疾患の診療の質向上を目指した重責を担うこととなった。今後の活動が期待される場所である。

おわりに

50 年の歴史を振り返ると、今日まで幅広く多くの研究者からの支援で発展してきた日本脈管学会と、その学術機関誌である「脈管学」も、医学、医療を取り巻く環境の大きな変化に直面して、その活動も社会と時代のニーズに応えた体制整備が求められるようになった。新たな視点から、日本脈管学会と「脈管学」のさらなる発展を心より願っているところである。